

広島の祈りをわたしたちがつなぐ

1 はじめに（児童・生徒の実態とめざす目標）

2 具体的なとりくみ

- ① 千羽鶴づくり
- ② 被爆体験伝承者講話
- ③ 長岡省吾さんについての学習
- ④ 修学旅行
- ⑤ 学習発表会

3 おわりに

三重県教職員組合

生川 伸弥（ナルカワ シンヤ）

津市立一身田中学校国児分校

今次教研で論じられた内容と今後の課題

今次教研では計7本の報告書で、2つの柱にそって討議がおこなわれた。討議内容や助言・課題を含め、以下にまとめることとする。

(1) 語り部・語り継ぎから学ぶ平和教育

津支部の中学校からは、広島への修学旅行での見学や出会い学習、原子爆弾の恐ろしさを後世に伝えるために奔走された方についての学習から、最終的に学んだことを発表する学習発表会で劇をおこなったという報告がなされた。学習発表会にむけての過程のなかで、最終的には「自分が学んだことを伝えていかないといけない」という自らが発信者になる必要があることに生徒が気づき、生徒自身の変容がみられるとりくみであった。

鈴鹿支部の小学校からは、ノートに綴られた子どもたち思いをきっかけに、平和学習につなげた実践の報告がなされた。自分たちが住む鈴鹿での戦争について、調べ学習や語り部の方のお話を聞くことで、子どもたちが戦争の恐ろしさについて、より深く考える機会になるとりくみであった。また、後遺症や被爆者差別に苦しむ人々についても学習することで、「戦争が起きていない＝平和」ではないことに気づかせ、「戦争の卵」を減らすためにはどうしたらよいかを最終的に子どもたちに考えさせる、身近な生活につながる実践であった。

伊勢支部の小学校からは、戦争体験者の方から聞きとりをおこなって作った紙芝居を用いた平和教育の実践の報告がなされた。自作の紙芝居の読み聞かせから、自分たちが住む伊勢でも戦争があったということを、より具体的にイメージできるように工夫がこらされたとりくみであった。また、人権週間などの機会に、他の教員に対してのアプローチもおこなわれているとのことであった。わたしたちも、再度平和教育の重要性を考える必要があると感じられるとりくみであった。

討論のなかで、戦争を体験した方々からお話を聞く機会が減っていることが大きな課題としてあげられた。語り部の方のお話は、子どもたちの心に響くものであるもので、コロナ禍でむずかしい状況ではあるが、深い学びの効果があるとの声があがった。また、語り部の方のお話を聞くことで、子どもたちがもっと知ろうとしたり、発信しようと考えたりする変容が見られたことは、成果の1つだと感じられた。

(2) 教材を活かした平和学習

名張支部の小学校からは、平和教育グループ研究会において、教材の中でできることを考えようと、国語・社会・生活・道徳を中心に、平和学習と位置づけられる教材を確認し、指導案の作成・実践をおこなったという報告がなされた。今回、視点があてられたのは、小学校3年生の国語の教材「ちいちゃんのかげおくり」で、場面ごとの読みとり後に、戦時中のようなすえがいた1～4場面と、現代のようなすえがいた5場面を比較することで、子どもたちが戦争の恐ろしさや苦しみ、平和について考える大きなきっかけとなるとりくみであった。

三河支部の中学校からは、歴史的分野の側面から戦争の原因を追究し、公民的分野の側面から平和を維持する方法などについて考える実践の報告がなされた。「単元を貫く問い」を設定し、生徒に学習の見通しをもたせてすすめられた実践であった。そのなかで、公民的分野の政治の学習では、政府の政策が、平和の維持を脅かそうとするとき、政治への関心や知識がないと、それをくい止めることができなくなるということに生徒が気づくことができていた。歴史的分野で学習

した内容が、公民的分野でもしっかりといかされたとりくみであった。

松阪支部の小学校からは、「平和」と「戦争」について、子どもたちのこれまでの生活体験から知っている言葉と結びつけて理解するために、絵本から「平和」や「戦争」がどのようなものかについて考え、理解するという実践の報告がなされた。授業の導入で、今の気持ちを理由も含めて発表させた後、泣いているウクライナの少年・少女の写真を見て、戦争に巻き込まれている子どもたちの苦しみを想像するというものであった。低学年の子どもたちが、より平和や戦争について考えやすいように工夫されたとりくみであった。

亀山支部の中学校からは、沖縄戦について学習した後、「SDGsの観点から戦争を考える」をテーマにグループで調べ学習をおこない、壁新聞にまとめるという実践の報告がなされた。現代の世界のさまざまな課題を、実際のいくつかのグループは解決策まで考えることができたようであった。また、戦争は過去のことではなく現在も起こっていること、そしてこれからも起こる可能性があることに気づいた生徒や、自分の身近なことつなげて考えることができた生徒もあり、成果が感じられるとりくみであった。

討論のなかで、平和教育の実践において写真や映像資料を見せるさいに、どのような配慮をしているかということが挙げられた。助言者から、平和を実現させることが平和教育の目標であること、写真や映像を見せることは方法の1つで、本当に見せる必要があるのか考える必要があるとのお話をいただいた。

成果と今後の課題

戦後75年が経ち、新型コロナウイルス感染症の流行が重なったこともあり、語り部の方々からお話を聞く機会が減っていることは、大きな課題である。しかし、子どもが自ら発信者になる実践や、自分が今できることを考えられる子どもが増える「語り継ぐ」実践がおこなわれていることは、大きな成果であると考えられる。

討論のなかで、ロシアのウクライナ侵攻について、メディアも大々的に報じており、世界情勢の緊迫した状況を痛感する人々が増えたが、第二次世界大戦後も世界で争いは耐えることはなかったはずだという意見があげられた。随分前から「戦争は過去のこと」ではなくなっていることに、わたしたちは危機感をもたなくてはならない。平和な社会の実現をめざし、今後もねばり強く実践を重ねていくことが必要である。

第71次県教研 司会者 新田 早紀

1 はじめに（児童・生徒の実態とめざす目標）

本校の児童生徒はさまざまな境遇で転入学してくる。触法行為によって家庭裁判所の審判を受けた児童生徒。被虐待や過酷な家庭環境での生育歴をもつ児童生徒。養護施設での生活に馴染めない児童生徒たちである。ほとんどの児童生徒は、本校に転入学してくるまでは学習機会は失われ、学年相応の学力は身につけていない。また発達上の特性のため、人間関係を築く上での課題をもつ生徒もいる。そのため相手の気持ちを考えず、心ない言動をしてしまうようすが見受けられる。このような実態をふまえ、学習習慣の徹底をはかるとともに、基礎学力の定着・充実、そして平和教育などを通して相手を思いやる心の育成にとりくんでいる。

2 具体的なとりくみ

とりくみの軸となるものが以下の項目である。

- ① 千羽鶴づくり
- ② 被爆体験伝承者講話
- ③ 長岡省吾さんについての学習
- ④ 修学旅行（出会い学習、被爆体験伝承者講話およびの碑巡り、広島市立袋町小学校平和資料館見学）
- ⑤ 学習発表会

とくに2学期の終わりにこれまで学んだことを発表する「学習発表会」が児童生徒たちの大きな目標となり、中学3年生にとって平和学習の集大成となる。

① 千羽鶴づくり

6月から10月にかけて国児分校全体で千羽鶴づくりをおこなった。中学3年生の修学旅行で、原爆の子の像および広島市立袋町小学校平和資料館へ奉納することを目的とした千羽鶴である。千羽鶴づくりを通して、その由来を学び、佐々木禎子さんの思いを知った。また小学3、4年生は『つるにのって「とも子の冒険」』（平和記念資料館推せんビデオ）を、中学生は『ヒロシマに一番電車が走った』（平和記念資料館推せんビデオ）を視聴し原爆の恐ろしさ知り、学習を深めた。



袋町小学校平和資料館へ千羽鶴奉納



原爆の子の像へ千羽鶴奉納

② 被爆体験伝承者講話

広島修学旅行で平和公園および平和記念資料館を案内していただく予定の大中伸一さん（広島県原爆被害者団体協議会 事務局次長）を8月26日に本分校に招いて伝承講話をおこなっていたが、新型コロナウイルス感染対策により講話は中止となった。

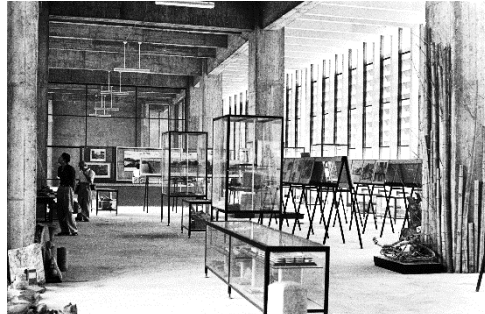
③ 長岡省吾さんについての学習

今回の平和学習のとりくみで中心に据えたのが、広島平和記念資料館創設者のひとりである長岡省吾さんである。長岡さんの生き様を「TSS 報道特別番組 ヒロシマを遺した男 ～原爆資料館

誕生秘話～」の視聴と平和記念資料館に展示されている長岡さん資料を通して学んだ。長岡さんは原爆投下の直後から、放射能に満ちた焼け野原に通い、血と汗を流しながらひとりで散乱する被爆資料を集めつづけ、その惨劇を後世に残すために奔走し資料館を作り上げた人物である。長岡さんの資料館創設にむけて奔走する姿から原爆の悲劇を学び、戦争や核兵器をなくしていくことは日本（日本人）の使命であることを知る。



長岡省吾さん



開館当初の展示室（1955 年）

広島平和記念資料館提供 収集/長岡省吾

④ 修学旅行

被爆体験講話や原爆ドームをはじめとした施設の訪問を通して、平和の尊さ・命の大切さを実感し、将来の自分自身の生き方や考え方につなげていく力を養うことを目標とし、以下の活動を修学旅行でおこなった。

・出会い学習

江種祐司さん（広島県原爆被爆教職員の会会長広島平和教育研究所研究員）より被爆体験講話

江種祐司さんは現在 94 歳。17 歳のときに被爆する。広島師範学校に通いながら将来は音楽教員をめざす。動員により宇品港沖の金輪島で船に弾薬を積む命令を受け、日々作業に追われる。原爆投下後、自分自身も怪我を負いながら、命令を受け、爆心地にむかって救助活動に出る。そのときに見た光景を語られる。



被爆体験講話のようす



被爆体験講話される江種 祐司さん

生徒の感想

A 唯一の被爆国であるのに、核兵器禁止条約を批准しない日本は前の戦争のことをどのように考えているのか。昔に犠牲になられた方々のことを今生きている人たちは忘れてしまい、考えてないのだと思いました。江種さんなど体験した人たちが、歳を取られて体験者が少なくなっているのだからちゃんと聞いてその教えをほかの知らない人たちに伝えていかないといけないと思いました。（一部抜粋）

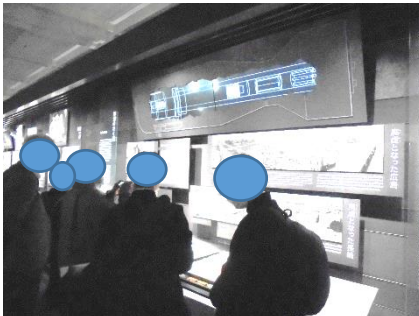
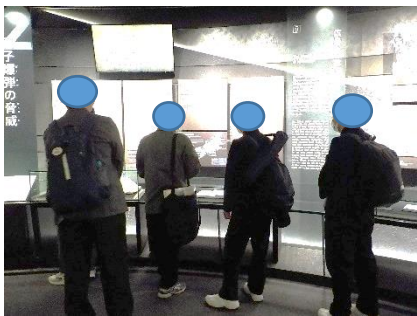
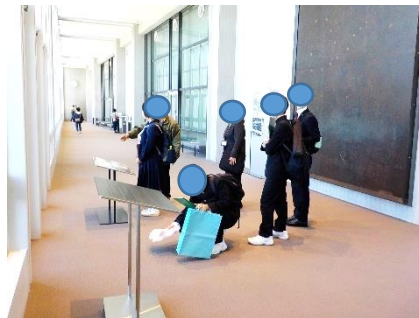
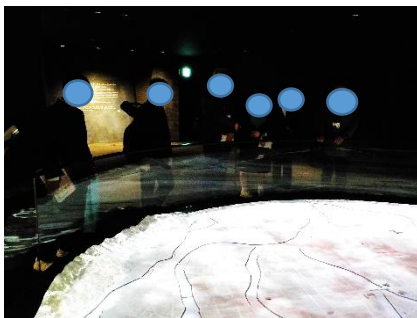
B 事前学習で核って怖いな～とかくらいにしか思ったり考えておらず、今回あらためて実際に被爆されている方からそのままの事実をはじめて聞かせていただいて、まず衝撃を受けました。（省略）川がホテルに来る途中にあって何も思わなかったけど、江種さんから台風で川や海の下に死

体が埋まってしまっていると聞いてなんか「わたしとても失礼だったのかな…」と考えてました。学生時代に命令で死体を燃やしていたのを知り、もし、わたしがそれをいわれても、とぼとぼ歩いている人や死人の道を歩けないと思うし、歩けたとしても運んで燃やすなんてとてもじゃないけどできないよな…とあらためて考える事もありました。（一部抜粋）

・被爆体験伝承者講話および碑巡り

大中伸一さん（広島県原爆被害者団体協議会 事務局次長）より

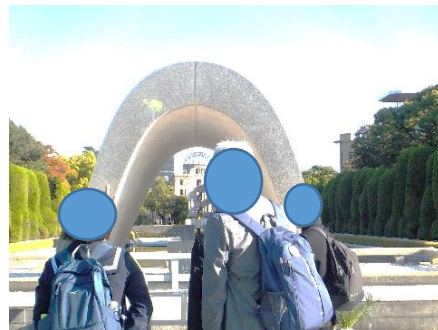
大中さんは現在 72 歳。広島赤十字・原爆病院で労働組合書記長をつとめる。病院内の被爆遺構を残す運動に参加し、これがきっかけで伝承活動をおこなうようになる。修学旅行当日は平和公園内の記念碑などや平和記念資料館の案内をしていただいた。大中さんの父は呉の軍需工場に勤務。休暇明けで呉に帰るとき横川付近で被爆されている。



広島平和記念資料館内見学



国児分校 平和セレモニーのようす



平和公園見学



大中 伸一さん伝承者講話

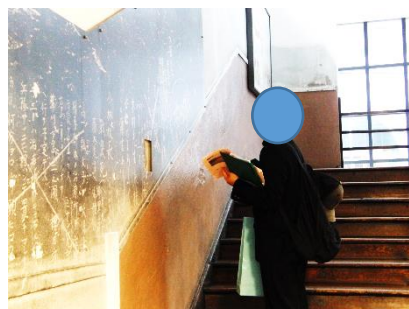
生徒の感想

A …今日は平和講話をしてもらいましたが、今でも核にたよる国があったり、日本も核に頼っているということを知って、日本も核を使わない国としていかなければいけないと思った…（中略）

B 大中さんの話を聞いてまず、禎子さんの話がいちばん気になりました。…どれだけつらくてもそれを親や家族にわからないように装うのが、小さいのにすごく、弱音を吐いたりせずに闘かったというのが何も言い表せませんでした。資料館のお話も目が出ていたり、全身火傷だったり悲惨な写真も多くこれが原爆の現実なんだなと思いました。（省略）伝えなければならない現実があって知らない人が世界に多く、知ってても知らんぷりして、核をつくりだす。なぜ学習しないのか、何も関係のない人を巻き込んで核戦争をしても何一つのこらないし、逆に失うものしかない。わたしは大中さんや江種さんの話を聞いて世界に住んでいる人みんなに伝わっていくといいなと思います。

・ 広島市立袋町小学校平和資料館見学

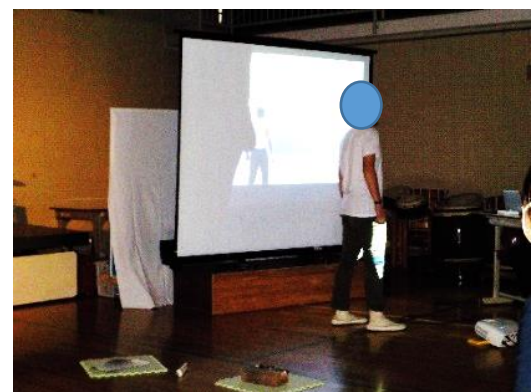
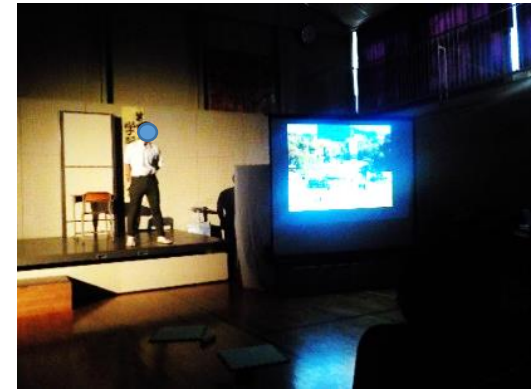
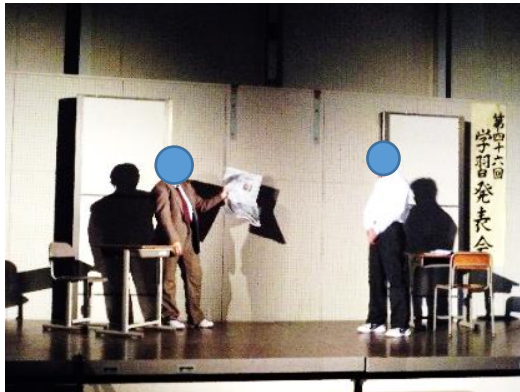
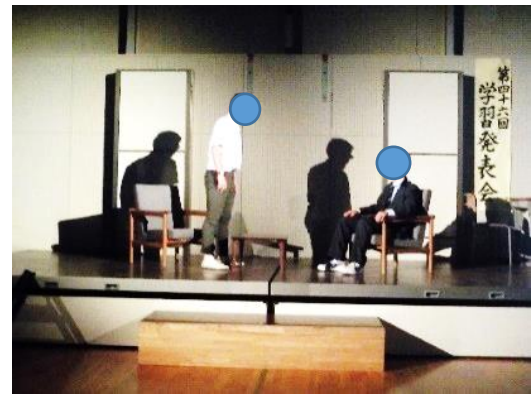
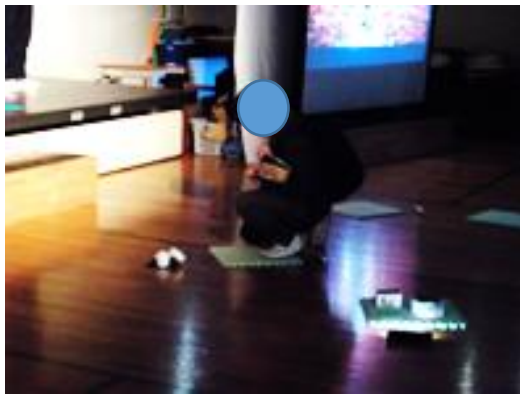
原爆の凄まじい爆風と高熱により、廃墟となったが、数日後には、被爆者の避難場所・救護所となり、本校児童・教職員・住民などの安否を尋ねる場となる。真っ黒に煤けたコンクリートの壁と床にチョークで書かれた「伝言」が大切に保存され展示している。ここではワークシートを中心に学習をした。



袋町小学校 調べ学習

⑤学習発表会

中学３年生はこれまでの平和学習の集大成として、長岡省吾さんの広島平和資料館創設の秘話を劇とプレゼンで表現した。生き残った者の使命として、「あの瞬間」に何があったのかを伝えつづけた長岡さん信念を、自分たちなりの表現で心を込めて発表をした。長岡さんと自分の気持ちをこめたメッセージは当日観客として訪れていた保護者、児童相談所職員、原籍校の教員など関係者達を感動させた。

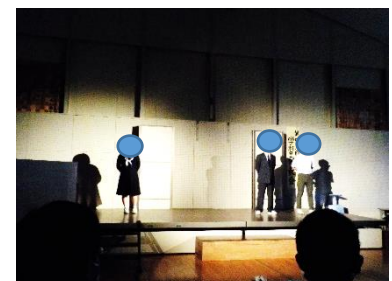


学習発表会のようす

・これまでの平和学習の3人の思い。

この発表の最後に「ひろしま平和の歌」を歌いあげながら、生徒一人ひとりが自分の思いを語った。

A 自分は原爆の恐ろしさを知り当時の人々の苦しさを想像しました。今も原爆の製造は終わっていない自分たちに関係のないことではないので、未来についてしっかりと考えていきたいです。そして今回被爆者の方の話を聞いてその話をほかの人にも伝えていけるようにしたいです。



思いを語る生徒たち

B わたしはこのようなできごとがあったにもかかわらず、世界には数えきれないほどの核兵器が存在していることがとても悲しいです。当時のものと比べると小さく軽いものが開発されています。わたしは今回学んだことを生かし、次の世代や世界中の人々へつなげていきたいです。

C 今回知ったことが多くありました。なかでもたった1発の原爆で14万人の人々が亡くなり、今でもその原爆症で苦しんでいる人たちがいるということです。今回話を聞いた方も、そのひとりだということを知りました。実際に写真を見せていただいたり、話を聞かせていただいたりして、ほんとうの原爆の恐ろしさを知りました。次は自分たちが伝える側として、平和な世界にしていくためのきっかけをめざしていきたいと思います。

・参観者のアンケートより

D さすが！最高学年、中学3年生の発表はとても見ごたえがありました。長時間の劇のセリフ、進行をしっかり覚えていて、しっかり練習したようすがうかがえました。修学旅行を遊び、観光に終わらず、ここまで見ごたえのある内容に高め、そしてわたしたちに伝えてくれたことは天国の長岡さんの意思をきちんと受け止めて、きっと天国の長岡さんも喜んでくれることでしょう。

E 歴史を学ぶだけでなく、歴史を伝え遺すことの大切さを学んでいると感じました。先生方の協力もありながらですが、3人で壮大な物語を演じるのはとてもたいへんだったと思います。劇の情感たっぷりに演じる姿はしっかり現地で学びとったものあるんだと感じさせてくれるものでした。子どもたち自身も負の遺産から学び、繰り返さないことが重要であることを学んでくれたのではないかと思います。

F 三人であれだけのボリュームの発表をされてさすが3年生でした。時間をかけて平和学習されたのですね。義務教育を卒業する3年生が平和についてしっかり学ばれたのがとても頼もしいです。長岡さんのことについてしっかり学んでいることがよくわかりました。それを劇を通して表現されていたからです。自分にとっても大変勉強になりました。

3 おわりに

『次世代への伝承』。この一点にすべてはある。

長岡省吾さんの生涯を劇・プレゼンを通してたどったことは、「真の平和とは何か」「今の世界の实態」をわたし自身も生徒とともに考えることができた。今後も国児分校の目標である「平和教育などを通して相手を思いやる心の育成」を軸に、平和を担う当事者は自分たちであることを言いつづけたい。

そして、彼らが劇・プレゼンでほかの児童生徒へ「平和への思い」を伝えられたことは、これからの国児分校の平和学習へつなぎ、来場していたおとなへも『発信』することができた。卒業後、彼らが平和へ対する思いをどのような発信するかを期待したい。

広島への修学旅行をはじめて5年がたった。当初から江種さんに被爆者体験講話をお願いしているが、毎年、お目にかかるたびに体調が心配される。被爆された方々の平均年齢は84歳を超えており、江種さんは原爆の影響でがんを発症・再発を繰り返しながらも体験講話活動を車いすに乗りながらおこなっている。

大中さんは「被爆体験者がいずれいなくなる。その日は近い」と危機感をもち、伝承者の育成に力を入れてみえる。

江種さんの講話は生徒たちに衝撃を与えた。講話の最後に生き残った者の使命として「命のある限り伝えつづける」という決意をおっしゃった。生徒だけでなくわたし達全員の心に刺さった。

平和公園の地中には弔われていない骨が眠っており、その上を歩いて平和学習をさせていただいていることを、わたしたちは忘れてはいけない。